



高津の民俗と高津姫伝説

2023.11.5

八千代市郷土歴史研究会

高津のムラの姿と祭り

蕨 由美

## はじめに

旧村高津は、姫神の霊の宿る里です。はるか古代、都からこの地に下った藤原時平の息女高津姫の流離譚にいろどられた伝説が、寺院やお堂、産土の社に息づき、神仏への信仰を通しての旧村のコミュニティの活動が今なお盛んな地域です。

高津姫の守り本尊を祭るといふ観音堂、高津山観音寺、産土の高津比咩神社を中心に、ムラにはさまざまな講やツジキリなどの民俗行事が継承され、また特に高津比咩神社が参加する「下総三山の七年祭り」は2004年に千葉県指定文化財に、「高津のハツカビシャ」は八千代市指定文化財にもなっています。

また「高津」という地名は、平安時代の『延喜式』に記されている「高津馬牧」の可能性があり、中世の城館跡といわれる武士の館跡をはじめ多くの歴史遺産が残っています。

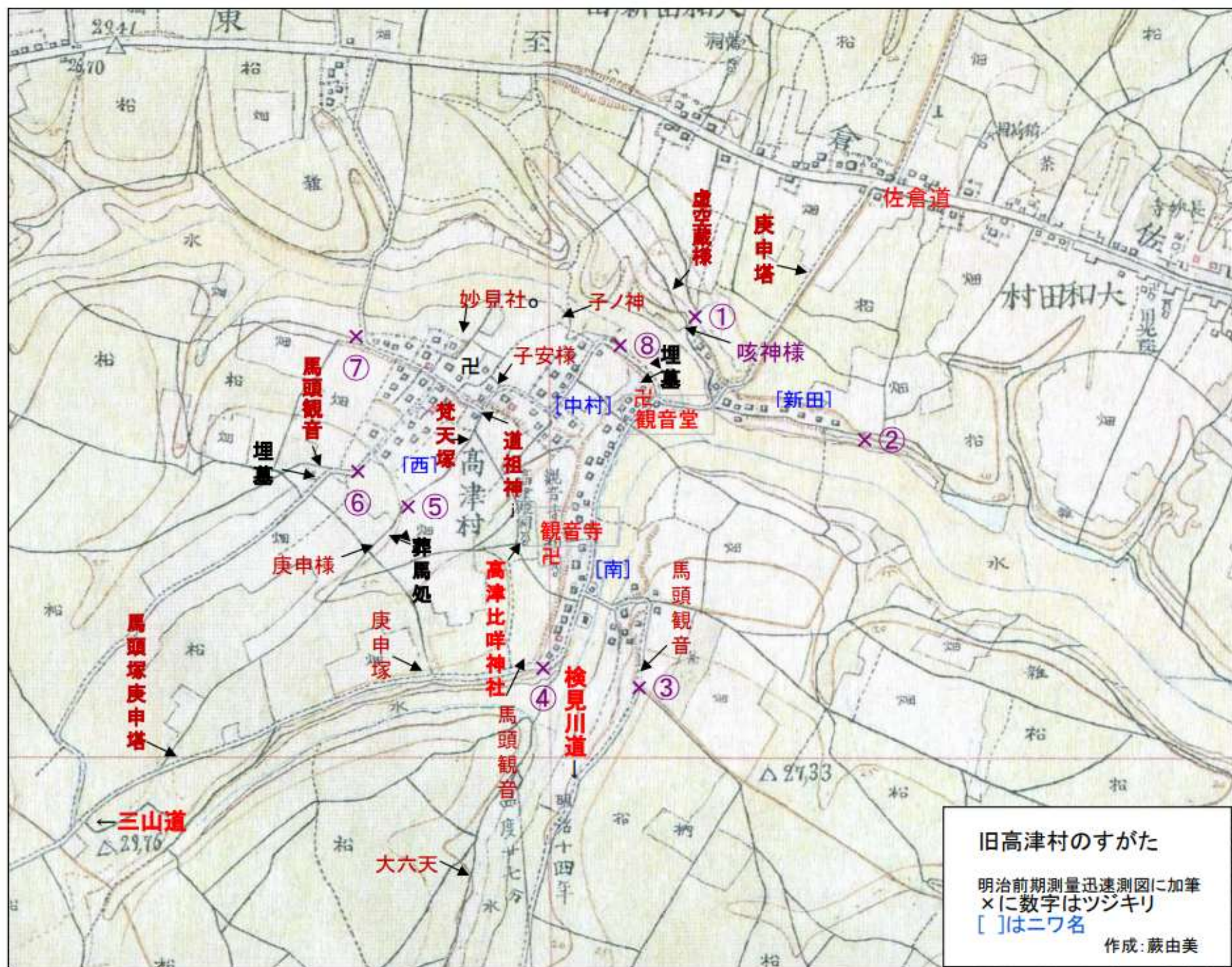
高津の「ムラ内」は、「中村」「南」「西」「新田」の4つの二ワ（庭）に分かれています。

11月1日に七年祭に三山へ渡御した高津比咩神社の神輿は、翌日の「花流し」の祭礼で、高津のムラ内を隈なく巡ります。

その範囲は、ツジ（辻）と言われる地点です。すなわち「ツジキリ」の行われる地点内で、かつて旧高津村の集落はこのツジの範囲にありました。庚申塔などが神輿の折返しポイントとなっている場合もありますが、高津の「ムラ内」は花流しの神輿の渡御によって認識されてきたといえるでしょう。

このムラ内の外の村域には田畑や山林などの「内野」「内山」が広がっていて、今はその多くが自衛隊演習地や住宅地、団地へと変貌しましたが、かつてはムラの生産と生活を支える重要な場所でもありました。





旧高津村のすがた

明治前期測量迅速測図に加筆  
 ×に数字はツジキリ  
 [ ]はニワ名

作成：藤由美



## 高津は中世城館跡が残るムラ

高津館跡は、高津川と宮間沢谷津の合流点の右岸、標高17mの台地にあり、東西・南北各200mぐらいと推定されます。ゴルフ練習場の右の携帯アンテナのさらに右側の竹林に二重堀などが残っていますが、残存する遺構は少なく、全体像はわかりません。

「根小屋」という屋号の家があることから家臣団の屋敷が麓にあり、またすぐ北西の付近に妙見社があることから、千葉一族の館であったと思われます。



2015年に「e地点」の発掘調査が行われた際には、障子堀が発見されました。障子堀は、堀底を仕切るような土塁状の障害物が連続して堀り残された堀で、畝堀とも言います。山中城など後北条氏の城郭の特徴で、八千代市では初めての発見でした。

この畝のある堀は二重堀の北の角の外をさらに直角に廻っていたわけで、嚴重な防御を施した館であったと推定されます。



# 高津は中世城館跡が残るムラ





## 高津は中世城館跡が残るムラ



### 妙見社

千葉氏一族の守護神北斗北辰を祀る神社です。  
天文11年（1542）創建と伝えられています。

### 「正福寺之跡」の石碑

正福寺は新義真言宗。阿遮羅山と号しました。  
高津比咩神社・高秀霊神の別当寺であったが、  
明治10年に廃寺となりました。

小字名「大門」は、この寺に関連する地名と  
考えられます。

現在、この石碑は、観音寺墓地入り口の「正  
福寺記念碑」の手前に移設されています。



## 高津姫伝説

平安前期、菅原道真を追放した祟りで亡くなった藤原時平の妻と第五息女高津姫は、東下りをして下総の久々田に至り、漂着した舟は石となりました。

母と姫は、花の洛の昔を偲び、亡父を慕い一堂を建てその御霊を「御山明神」（三山の二宮神社）として祀りました。

彼女が守り本尊としていたのが、行基作の尊像「十一面観世音菩薩」で、元は父の時平に伝えられ、高津姫に与えられたといわれます。

姫はこの地に堂を建て、その観世音菩薩像を安置しました。

母子亡き後、お堂は荒れていましたが、雨漏りを応急措置した猟師が観音様に救われて蘇生したということがあり、また家人が、観音の慈悲の心をくみとり、その像を弄ぶ子供たちに与えると病気が癒えたとのこと。

正慶年中（1332～3年）千葉之助後胤公がその因縁に感動して、村名を「高津」となし、お堂を改築し、霊社（高津比咩神社）に高津姫を祀り村の産土としました。その傍に創設されたのが、観音寺です。

天正（16世紀）のころ、千葉之助の後裔が霊社を修理し、「大悲閣」を再興、荒廃することがないよう良田を寄付されました。

『高津山観世音 略縁起』による

三山の二宮神社と津田沼の菊田神社の伝承によれば、時平の子孫である藤原師経が治承4年（1180年）下総国へ流罪になった際に到着地にある久々田大明神（菊田神社）と移住先に鎮座する三山明神（二宮神社）に祖先の霊を合わせ祀ったという。

八千代市内には江戸時代初期に創建された「時平神社」が4社ある。





# 高津山観音寺

## 観音寺本堂



観音寺本尊  
十一面観音坐像

観音寺境内の  
韓国式鐘楼



八千代八福神の  
布袋様





# 高津山観音寺境内の石造物



結界石  
「不許葷酒入山門」  
天保2年（1831）

新四国霊場塔・道標  
「是ヨリみやま村神宮  
寺一リ・・・」  
文化6年（1809）



十九夜塔など  
女人講石塔群

十九夜塔  
如意輪観音像  
延宝2年



観音堂 改築前の姿



念仏講 (解散前)



埋葬 (墓地整備前)



ムラの産土「高津比咩神社」



お宮参り

下総三山の七年祭り  
2004.11.2~3





# 高津比咩神社のハツカビシャ



# ハツカビシャで行われる オトウワタシ





# 高津の庚申塔



左：宮ノ前 貞享2年（1685）  
中：馬頭塚 享保5年（1720） 寛政4年（1792）  
右：消防署前 延宝2年（1674） 昭和8年（1933）

宮ノ前庚申塚（現在は高津比咩神社右横に移転）



# 高津の辻切りと咳神様と馬頭観音群



辻切りと馬頭観音塔群（南）



辻切り  
環状の勸請縄タイプ（南など）



ポリ袋タイプ（新田）

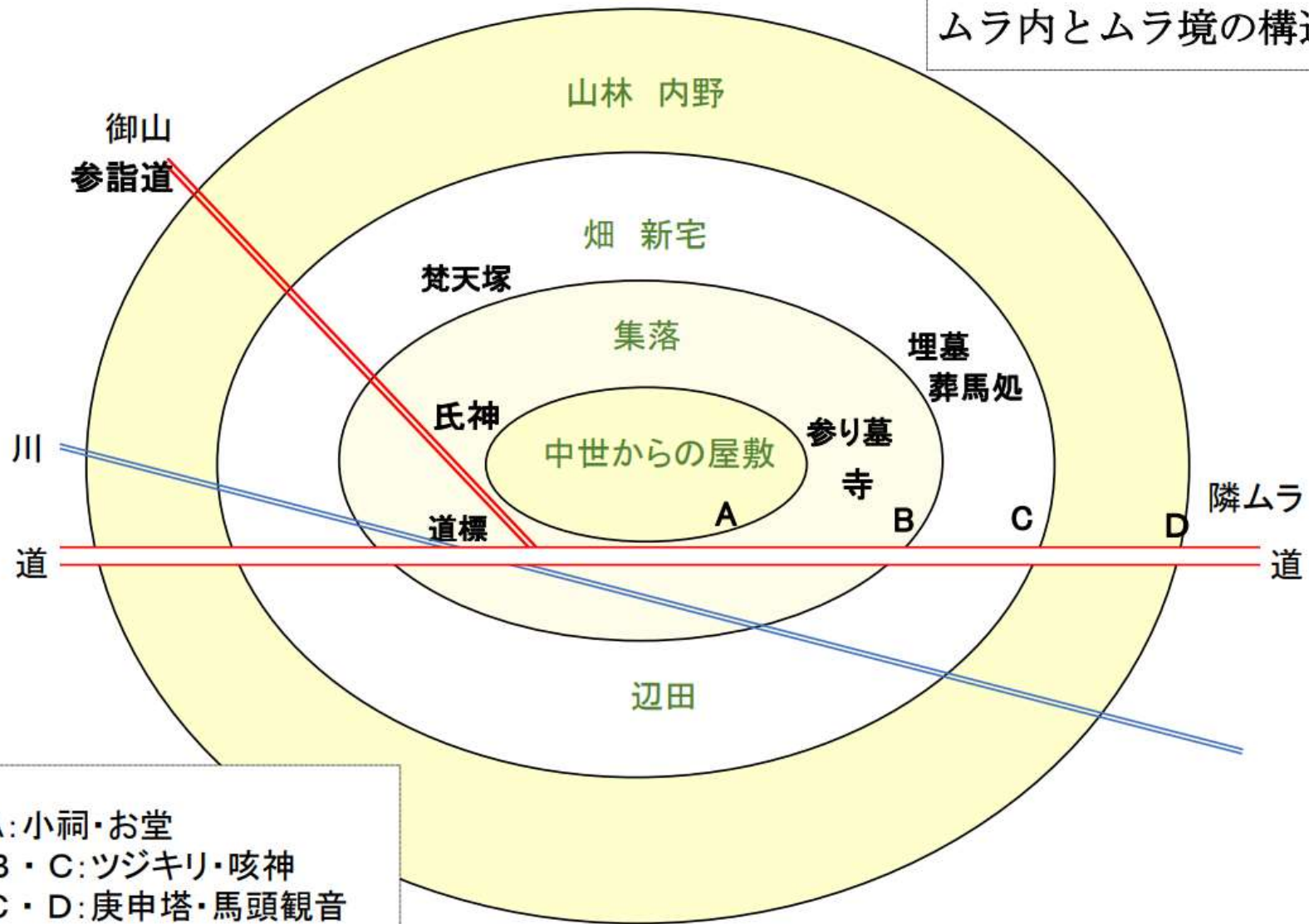


新田の北田にあった咳神様（観音堂に移転）





# ムラ内とムラ境の構造



- A: 小祠・お堂
- B・C: ツジキリ・咳神
- C・D: 庚申塔・馬頭観音



# 下総三山の七年祭り (千葉県無形文化財)

2004.11.2～3の記録



神揃い場で  
宙に浮く神輿



祭りの準備

↑ 2015.10.16神輿の手入れ

↓ 2015.11.1屋台の飾りつけ

三山の七年祭りは、七年に一回、近隣9神社の神輿が三山に集う祭りです。

藤原時平の子孫が久々田（菊田神社）に流れつき、三山の二宮神社の神主となったという伝承があり、9社はそれぞれ時平の一族と結びつけられていて、二宮神社が父、時平神社は長男、高津比咩神社は娘とされています。

また一説には、千葉一族の馬加康胤の妻が二宮神社など4社に祈り、無事に男子を出産したことに由来するともいわれます。





下総三山の七年祭り 2004.11.2



早朝の高津比咩神社での式典  
御魂を遷した神輿が若衆に引き渡され、  
三山二宮神社へ（トラックで）出発



二宮神社の2軒の氏子宅（ヤド）に寄り、  
街中の七曲りの道を渡御、神揃場へ向かう





下総三山の七年祭り 2004.11.2

神揃場に九社の神輿が集合  
三山二宮神社へと出発



二宮神社の本殿に昇殿する神輿





下総三山の七年祭り 2004.11.3

翌日はムラ内を巡幸する「花流し」が行われます



夜遅く「御魂遷し」の儀  
で終わりました





## おわりに

高津は、近現代に大きく変造した街ですが、旧村のムラ内の姿は、よく残っています。また、ムラの行事として祭礼や民間信仰も、高津姫伝承とともに、伝えられてきました。特に、ムラ内の境には、悪霊が入らないよう、辻切りや庚申塔などを祀り、七年祭りの「花流し」では、ムラ内の安寧を守るように神輿の巡幸が行われています。

また、広域な七年祭りの9神社、市内4神社に、時平公とそれに関連する伝承があることも注目されます。

今回は、八千代市内の一つの旧村「高津」を取り上げ、近世以前のムラの様相についてをご紹介します。

ご清聴ありがとうございました。

なお、今回の講演に関連して高津姫ゆかりの地を訪ねる散策が、11月11日に観光協会主催、八千代市郷土歴史研究会会員の案内で実施されます。



消防署前の庚申塔で折り返す神輿



春の高津山観音寺遠望